

# 立石楽について

入江英親

宇佐、速見、国東半島の各地では、宇佐神宮をはじめとして盛んに楽打ちが行われていた模様である。しかし何時の頃からか次第に影をひそめ初め、終戦を境として僅かに吉弘（武蔵）、若宮（杵築）、立石（山香）、辻間（日出）の諸楽を除いては、宇佐神宮の楽打ちすら中絶してしまっている。往時の盛況は、各地に残る「楽庭」の地名によつて僅かに推察されるまでである。現在命脈を保っているものの中でも、立石楽の如きは中絶の一步手前という実状である。内容の明かなうちに広く一般に紹介しておくことは、決して無意義ではないと思うので、今回発表さしていただくことにした。

## 一、立石楽の起源

後陽成天皇の文祿年中豊臣秀吉が朝鮮を征伐し、肥前の国名護屋から凱旋のみぎり、戦勝を祝つて楽を打ったが、これを豊臣家とはゆかり深い立石藩主木下侯が藩内に伝え今日に至っている。これが立石楽だと伝えられているが、その起源については、これを立証するに足る古記録は今の所見当らない。ただ豊後跡考に

豊後の俗に楽といふもの有、大なる太鼓をむねにかけ、腰に木皮の裳をまき、うしろに旗をさし、鉦、笛を和し是をたつる事軍法になぞらふ、そここの神祭に専らこれを奏す。其調清家木村吉弘富来等ありむかし屋形の時諸将各城によりし時始めしとかや

とある程度のものである。しかしながら山香町立石町立石地区水ヶ迫神社前に石碑が立っているが、その碑文によると、少

くとも今から二百七十年余り前には立石楽の行われていたことが明かである。即ちその碑文には次の通り陰刻されている。

豊之後州木下尚秀重俊君領邑林間有宮曰水迫傍其山根又有田数百步常待時雨以耨動是乾潤失節故民尚成無□遺之嘆矣其岩傍古祠下一日俄甬崩碎活水混々不舍晝夜自是以往有利播種民衆欣抃每年至秋九月各成俗樂鼓之舞之以賀其神共賀豐感也是所以天之降其瑞而民亦育其德者乎易蒙衆曰以育德因以名之且爲邑主祝萬萬世世長以保之者宣矣請余記其故事故不能固辭述所聞之大略云

元禄十一年戊寅夏四月 銘曰

志彼靈泉脉脉漏漏盈科而分流既溟滋恩止水餘潤白天何祈膏雨共利公田以名育德

沿保萬年武陵桃源 野沂題

この碑文によれば、水ヶ迫附近の農民は従前は只天水によつて耕作していたので、時々旱害を蒙つて苦しんでいたが、或る時水ヶ迫神社の傍の岩が俄に崩碎して活水が湧出し、これから田畑は水利の便を得るようになった。これは全く神の恵みであると民衆は抃舞して喜び、秋九月には毎年俗樂を奏して感謝し、あわせて豊穰を祝つたと云うのである。元禄十一年といえは立石三代重俊侯の時で、今から約二百七十年前に当るので、前記の通りこの立石楽が少くとも二百七十数年前から行われていたことだけは確實である。

## 二、立石天満社の楽打ち

立石天満社が現在の位置に遷座されてから毎年九月二十五日に大祭が行われているが、現今のように御神幸はなかった。藩主木下侯は祭典の当日大手門から社参せられたが、その行列は正装の大名行列で、領内各村五十二軀の楽打ちが御本門からお供の行列に加わり、道楽を打ちつつ参進した。やがて領主は社頭に達すると石鳥居の所にて下乗し、徒歩にて拜殿に昇り拜礼を終れば、拜殿の上より北面して着座される（社殿が北面している）。この時五十二軀の楽手は半円陣を作つて奏樂の体形と

なる。やがて楽人中の若者一人烏帽子直垂にて石畳の上から藩主の方に進み出で、一礼して唱え言シカシカを述べる。シカシカの申言ホシゴトが終れば直に十二段の楽を奏上したのである。藩主は楽打ちが一段終れば前のように行列をととのえて帰館されるが、楽隊は後に残って三段を打ち終ってから解散した。この日藩主から楽手には一人につき札三匁、「シカシカ」には米一俵が下された。

現在立石天満社の大祭は九月二十四日五日の両日にわたって行われているが、舟部落の人人により二十四日は本社の社頭に於て楽打ちが行われ、二十五日は本社から約三町許り隔った立石中学に接するお旅所に於て奏せられる。なお御神幸の道中に於ては供奉して道楽が奏せられる。

### 三、立石楽の構成

立石楽の現在の構成は次の通りである。

(イ) 音 頭 一人 (シカシカの申人)。

(ロ) 笛 四人。

(ハ) 鉦 三人。

鉦の三個中一個は江戸時代のものが保存され、次の通りの記銘が陰刻されている。

為法名釋道順俗名布屋市治郎 施主布屋金兵衛 京六条住内藤近江作

他の二個は最近製作したものである。

(ニ) 心 楽 二人。

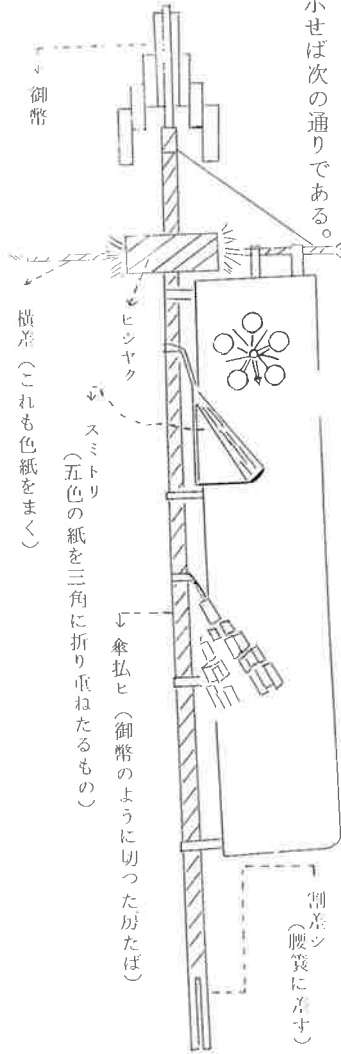
(ホ) 外楽打子 二十人。

四、服装及び楽具

- (イ) シカシカ 白衣の上に狩衣をつけ、烏帽子をかぶり、白足袋、藁草履すがた。御幣を持つ。  
 (ロ) 笛・鉦 この役の者は何れもカミシモを着け、袴をはく。陣笠をかぶり、白足袋、藁草履すがた。笛吹は横笛、鉦打ち  
 は鉦を持つ。

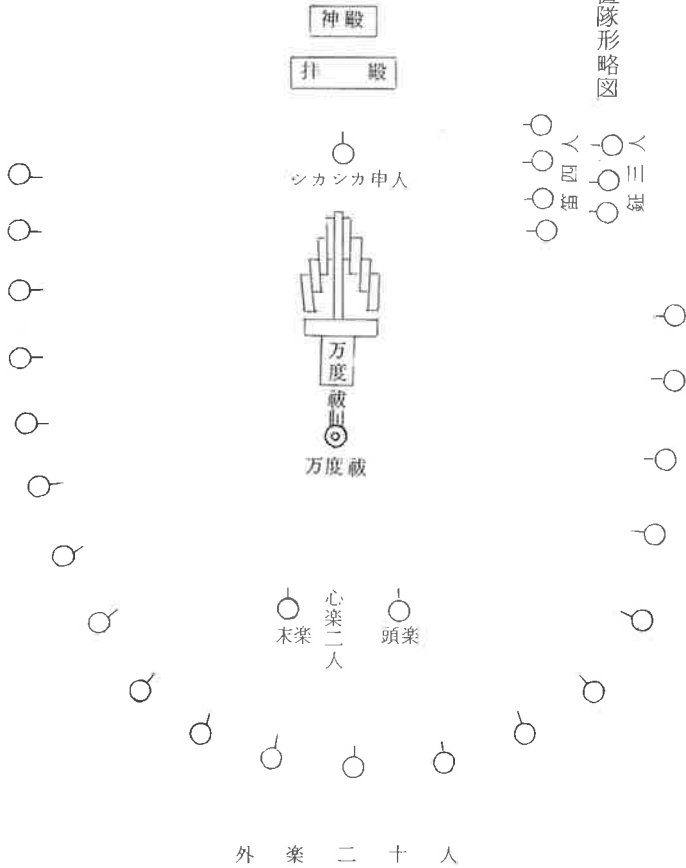
- (ハ) 心楽及び外楽打子 全員紺飛白の筒袖衣。水色の手巾。腰にはヘラの腰蓑をつけ、白足袋、草鞋すがた。背には幟差物  
 をつけ、胸前に締太鼓をかける。締太鼓は掛け総と称する長さ一丈の晒木線で太鼓をくくり、これを腰にまわし、更に肩  
 に廻わし、背にタスキを掛け幟差物の動かぬようにくくり付け、末端は背に長く垂らす。両手にはそれぞれ撥尻に五色の  
 紙のピラピラを取り付けた撥を持つ。

幟差物は心楽の幟は青色の布に梅鉢の紋入（昔は頭楽は月、末楽は日の紋入）、外楽の打子の幟は赤のモミ布に梅鉢の紋  
 入（昔は各自、家の定紋）。外に一本の篠竹の小袖を付け、これには五色の紙でピラピラを取付ける。なお上には角取り  
 三角を折り、下半拂にはメの子に切り、大竹の真上には心楽のうち頭楽は銀幣を、末楽は金幣を、打子は白の紙幣をさす。  
 幟差物の図を示せば次の通りである。



心楽は頭、末とも青織、頭楽は銀幣、末楽は金幣、外楽は赤織、外楽は白幣、一丈の晒木線で太鼓をくくり、これを腰にまわし、更に肩に廻わし、背にタスキを掛け、幟差物の動かぬようにくくりつける。この一丈の晒木線のことを掛け総かけぞうという。

五、庭打配置隊形略図



六、樂打ち次第

(一) 先ずシカシカ申人拜殿に向い、大幣を左右左と破い、一礼して次の申言をとなえる。

シカシカに糺り出でたるは当所船村の者で御座る。さてさて今日は天氣も静かに、参る人人殊に賑かに御座る。されば当地天満社(舟の時は六社大権現)の大前に御祭礼の樂打ち清め奉る。

(二) 次に一礼して東の方一般参詣人の方に向つて次の申言をとなえる。

そもそも此の樂は、文祿の役に豊臣秀吉肥前の国名護屋より凱陣の砌り、戦勝を祝いて打ちたるものと伝えられ候。秋の稔りに御国いよいよ豊かに、在所より参る人人。何れも寛寛ユルユルと御見物なされ候え。

(三) 次に又更に西の方樂隊に向つて、

笛、鉦、太鼓の頭樂、いそぎ御樂始め候え。いそぎ、いそぎ候え。

と持つている大幣を左右左と破う。笛、鉦は直に七ツ鉦から打初める。

外樂唱歌

(一) ツウツウ チェーン

ツウツウ チェンゴ チェンゴ

ツウツウ チェンゴ チェン

ツウツウ チェーン

ツウツウ チェンゴ チェンゴ

ツウツウ チェンゴ チェンゴ

(二) ガアラン ガアラン ガーア

ガアラン ガアラン ガーア

(註) ツウとは左手にて太鼓を叩く、チェーンとは右手にて太鼓を叩く。

(註) ガアランとは左右に横に動き、最後に拜むようにする。

(二) ツウツウ チェン ツウツウ

チェンゴ チェンゴ

ツウツウ チェンゴ チェン

ツウツウ チェーエ ツウツウ

チェーエ

ツウツウ チェーン チェン チェー

ツウツウ チェーン チェン チェー

三節迄二回繰り返す。

#### 四 念仏

ハーナンマアミドーオイ

ハーナンマミドーオイ

ハーナンマミドーオイ

ハーナンマミドーオイ

ハーナンマミドーオイ

ハーナンマミドーオイ

ハーナンマミドーオイ

ハーナンマミラーアッポ

(註) 開くとは右手を前に窓出し、左半分廻り又前向となる。

前に戻り後に左右に一回転する。後変す。(変すとは次の段になること)。

(註) 之は心業の末業が発唱し、其を鉦打が同じ口調にて唱え、鉦に合せてやる(之を鉦打が受けるという)四回繰り返し変わす。

(註) ナンマミドーオイとは右足を半分出し、右手で鼓を叩きつつ左に廻る。

ハーナンマミラーアッポで前に戻る。

(五) 笛の段

ヒアーリウーリヤーアス

チェンゴー チェー

チェン チェン チェンゴ チェ

チェン チェン チェンゴーチェ

(六)

チェンゴー チェー

チェ エス チェ エス

チェンゴウ チェー

ツウ チェ チェ チェン

チェ チェ

チェ チェン チェ

ナア モウ ゼエ

ナア モウ ゼーエ

中 入

ツウツウ チェーン、ツウツウ

チェンゴ

チェンゴ ツウツウ チェンゴ

(註) 笛の段は此の楽に対し笛として第一の心随である。楽打子として最も興味深い所でもある。

(註) ヒアーリウ、リヤーアスとは反対に後向になり、元に戻り、足を右より

左にはね上げて右と左に廻る。此の楽として最も勇敢な場面である。

開く

斜右に飛び出し、右廻りに半分廻り又元に戻りて足なくチェンゴーチェーを繰返す。変わす。

(註) 右足を左足に掛け拜むマカようにする。

(註) 打始め一番と同じ、三番迄同一動作である。



チエン

ツウツウ チェー

ガアラン ガアラン ランガー

ツウツウ チェン

ツウツウ チェンゴ

チェンゴ

ツウツウ チェンゴ チェン

(八) 受

チイ チイ チェン

チェン ガアン カア

ツウツ チイーゴー ガンガン

ゴーガン ツウツ チイー

ゴーガン

(九) ツウーチイー ツウーチイー

ツウチイー ツウ

ツウ チイ チイ

ツウチイーチイ ツウチー

ツウツウ

チイ チイ ツウ チイ チイ

(註) 開く。四番と同じ動作である。

(註) 鉦打がガアタン ガアタン ガーガアタン ガアタン ガーと四回叩く。

最後に足をかけ拜むようにする。ツウチイーゴウガンゴウカンで左右に一廻りずつする。手は右左に交互に上下する。足は両足を同じく交互に上下する。

(十)

ツウ チェン ツウツウ  
 チェン チェン  
 ツウ チェン チェン  
 ツウツウチェー ツウ  
 チェントーナ  
 ツウツウチェー ツウチ  
 エントーナ  
 ツウツウチェー ツウチ  
 エントーナ

(十一)

開く

ツウ チェン チェ  
 チェン チェ チェ  
 チンゴ チェンゴ チェーンゴ  
 チェン ガタガタ チイ

(十二)

カタカタ  
 ヒャーリウ リャー  
 チェンゴウ チェー  
 ツーチェン ツー ツー  
 チェン チェン

(註)

ツウツチェとて右足を上げ左足をけ出し、左廻りし元に戻る。二回目にきりきりと一週す。後足を引く同一唱歌にて

(開く)

飛込んで右に半分廻り元に戻り足がない後、ひざを曲げ左右に上げる。

(註)

八番と同じ動作  
 最後に足を前に掛け拜むようにして。

心楽は外楽の譜合と同一であるが、二回宛繰返し、別に一段一段と引廻しとして円形の中を一週するのである。  
 なお、道楽は(一)(二)を繰り返し打ちつつ斜左斜右ときざみ足で小早に進む。

七、結 語

以上を以つて立石楽の概略を述べた次第であるが、現在立石天満社の大祭に奉納しているのは舟部落の人人である。舟部落の人人は旧藩時代から旧暦九月九日をえらび、毎年尾台の頂(部落北方の裏山)の六社権現遙拜所に、部落民総出で、牛馬二駄に酒肴をつけて登り、楽を奏して災厄を祓い、五穀豊穰のお礼まつりを行っていた。最近では野焼きが出来ず、山登りが困難となつたので、毎年部落内の辻の堂から、六社権現を遙拜し、此処にて楽を奏し、部落民一同此の日はおこもりをしている。立石地区に於ては、この舟部落の楽打ちの外、龍ヶ尾部落でも旧藩時代から水ヶ迫神社並に水ヶ迫観音のお祭に楽を奏上して、水祭と五穀豊穰のお礼祭をしているが、現在は四、五軀位に止どまり、僅に命脈を保っているに過ぎない状態である。

山香町には最近まで山浦楽も行われていたが、山浦楽は日出町辻間楽と同一系統のものであつた。これに対し前述した舟部落水ヶ迫部落民の行う立石楽は、東国東郡武蔵町大字吉廣で現在行われている吉弘楽に類するものである。杵築市若宮八幡社で行われている若宮楽もまたこの系統のものと思われる。上記の通りこの地方の楽打ちは、強いて分くれば二つの系統があるように思えるが、大同小異の念仏楽である。宇佐神宮の楽打ちも昭和の頃は「トトオツカーミー エーミー ターミー」と唱えながら乱舞していたが、以前は「南無阿弥陀仏」と唱名を唱えていた由である。

本稿は立石楽を、記録作成等の措置を講ずべきものとして大分県の指定を受けるために、去る昭和三十四年五年の兩年にわたつて調査した際のメモをまとめたものである。この調査に当つては山香町文化財調査委員の梅田素輔氏から終始調査の便宜

や、資料の提供を賜ったことを感謝して本稿をとじることとする。ちなみに立石樂は昭和三十六年三月十四日記録選択、同四  
十一年三月二十二日重要無形文化財として大分県の指定を受けたことを付記しておく。